

第1問 次の問い(問1～3)に答えなさい。

問1 次のa、bの傍線部の漢字と同じ漢字を含むものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号はa―□1、b―□2、c―□3、d―□4、e―□5。

- a 郷会のサットにたゆめ込む。
 ① 観光客がかりかへる。
 ② お互いのたいひをだたえあへる。
 ③ 前例をしらぬ。
 ④ 企画案をしらぬ。
 ⑤ 計画をしらぬ。
- b 主人公がキミオに惚れる。
 ① アキオのキミオの作化を疑す。
 ② キミオヨリヨリキミオで依拠をなす。
 ③ キミオヨリヨリを疑する。
 ④ 真相をキミオにする。
 ⑤ 会議がキミオする。

- c 福利コウをコウとしていく。
 ① 新しいコウにコウする。
 ② 秋のコウコウ行事になごう。
 ③ 文化のコウにコウした。
 ④ オンコウな性格で人型がある。
 ⑤ 判決にコウなのでコウした。

- d システムをキミオする。
 ① 経済をキミオする。
 ② 書類をキミオする。
 ③ 海外にキミオする。
 ④ 相手にキミオを示す。
 ⑤ 政敵をキミオする。

- e 社会からキミオされて生きる。
 ① キミオでキミオな性格。
 ② 敵のキミオが入る。
 ③ このキミオがキミオだとキミオしている。
 ④ 会社のキミオ改革を行う。
 ⑤ 意思のキミオをはかる。

—1—

—2—

問2 次のa、bの空欄()を補って四角群語を完成させるのに最も適当な漢字の組合せ(ただし、漢字の順番は右の熟語に使われている順番と同じとは限らない)を、後の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし同じものを繰り返し用いてはけません。解答番号はa―□6、b―□7、c―□8、d―□9、e―□10。

- a 狂奈() ()
 b () 想() 外
 c 千() ()
 d () 謀() 慮
 e 巧() 令()

- ① 遠・深 ② 幸・天 ③ 言・色 ④ 濁・載 ⑤ 曲・折

—3—

問3 次のa、bの空欄()を補って慣用句を完成させるのに最も適当なものを、後の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし同じものを繰り返し用いてはけません。解答番号はa―□11、b―□12、c―□13、d―□14、e―□15。

- a () をキミオ
 b () をキミオ
 c () をキミオ
 d () をキミオ
 e () をキミオ

- ① 横車 ② 脚 ③ 物議 ④ 梁塵 ⑤ 夜露

—4—

第2問 この文章を読んで、後の問い(問1～5)に答えなさい。

① 私の意識だけが踊りだしている(画)とは、こんな構図である。自然も人間も、どこかで結ばれていて、その網の目のなかで、それぞれの役割がある。それは、かつて私を救った、世田谷に飛ぶ武蔵野の線路とは違う。車は自然が残る場所はない。車に乗りこくことを過剰に謝罪しなさい。そこは画というては出発地でもない。(画)の何が良いのか、描かれても、神性を表せることはできません。無理に答えてしまうとすれば、私は神性を信じて憑依するしかないだろう。

それはなぜ神が降りた場所なのである。

ここで、(画)という言葉は、私なら社会では、神が働きをもつてくれたような気がする。たとえば、夜明け(ふさわ)と眠り(ふ)と(と)と眠りでもかまわなければ、(夜明けに降る)というとき、人々は車に出身地に行くことだけを表現してはいなかった。故郷は出身地でもあることに変わりはなく、故郷に帰ることによって人生をやり直すという意味を、この言葉はふくんでいて。

私なら社会では、神とは、やり直す、元に戻す、という意味をもつていて。

そのことを明確に示しているのは、最近の歴史学、あるいは歴史社会学の研究である。なぜ日本の歴史では、神話がたびたび登場しているのか。歴史をこじらせた自然とは何を求めたのか。そこに、一歴史の状況に戻すという意思は働いていないか。

降ることによってやり直す。それは伝統的な改革の構図であるとするなら、(夜明けに降る)という言葉をまた、降ることによって人生をやり直す。自分の存在を憂えるという意味をもつてはせずである。そして、たとえ神は、降ることで(夜明け)は、人生をやり直すことの意味も場所だからだろう。

よする、私にとって(画)とは何か。それは神が元に戻ることでできる場所もある。近代化された社会では知性に囚われてきた神が、(画)に降り、葦原川と畑と風と、そして村の人だれとともに居るとき、元の自然な状態に戻っている。知性は自己

を主張するが、神は自己を主張することの極しさを、自然は人間の網の目のなかになんか存在するだけの音を告ぐ。もちろん、そのようなものを神と表現するのは不当なかもしれない。私は神とは何かを知らない。それが存在するかどうかも知らない。それに、私が書いている神とは、意識とも違へ、それは非知性な人間の根拠であり、ここではないところへ神と書い

ておくほかは、書かないものがある。(画)には、うらみあやまちを書いておくほかはないものが、いくつかあるのではないだろうか。たとえば、自然。この言葉も不適当な気がする。なぜなら明治時代に外来語の自然を意味する言葉を日本語に訳すために、自然という言葉は無意味ではめられた。ところが、人間の外にある自然を表現するのだから英語の自然であり、伝統的な日本の言葉遣いでは、自然を人間の外にある多岐的なものとはしていない。それは人間と時空をともにするもの、相互性をもちながらも存在しているものであり、万物の動きのなかに、自然も人間も同じ時空のなかで舞臺しているものもある。だから、(画)の言葉遣いでは、森羅万象といふほうがよほど正確なのだけれど、今日の社会では、うらみあやまち自然と書いておくほかはない。

② (神)とはひつとである。(画)は、少なくともキリスト教やイスラム教があるような絶対神ではない。それは、昔から(画)を守り、(画)の人々や自然とともに降りてきた神々である。しかも神々は、その存在を証明する必要はない。昔から、人々が神々を感じながら暮らしながら、そのようにものとして神々が存在しているのだから、ここでは存在を主張するという人間と神々との関係が、神々を表現するものである。Xが先にあるのではなく、Yがまず先にある。

もう一つ(画)の神々を信じて誓うことだからわかれないが、ここでは神と書いておくほかには表現方法をもたない。二女問は、(画)とはなんぞか。尋ねる、それは其のなかにいふことになる。なまなま、(画)の言葉遣い、しばしば、知性によつてはとらえられない性格をみよのだから、とりまに言語の概念は神々と結びついている以上、(画)による神話的なものを表現しようとするとき、言葉には理しよつてしまふ。(画)は、論理を超越した、すべてのものが相互性をもちながら存在する時空のなかにある。知性だけでは言葉でもないような。

だから、私の神は、たとえ(画)に降りたにている。

③ 現代人は、一度、この(画)を抱きかかろうとした。そして、(画)を現実として人々が生まれ、それを世界だと私たちが暮らした。私には(画)を抱きかかろうとした、もう広い世界に出ていかなければいけないのだ。よやく、その産しに気づいてきた。もちろん私には、広い世界で活動することはできる。私には、神がおり、世界がある。

だが、広い世界とは狭い世界だったのだろうか。いま私に問う。私には、広い世界に目を奪われて、狭い世界を失ったのではなかったのか。

降りた世界をもちながら、広い世界で活動することもできたはずだ。人生をやりなおせる場所をもちながら、知性によつて自己を主張しなくても、自然は自分の存在を証明できるような場所をもちながら、広い世界で動くこともできたはずだ。

しかし私にはそのまじは暮らさなかった。(画)と、神やエンターテインメントなどのものは存在しているように暮らした。その言葉、私には何を告げたか。神は何かがある。だが祈りだ。

知性は降りたから、神々のなかに自分の存在をみつけた。ところが神は(画)を超越している。(画)だけでは存在の場所をみつけない。

私には、二十世紀の暮りになって、知性だけに依存したこの敗北を味わった。知性に依存するとは、知性によつてくれた技術、言語、倫理、政治経済に依存することである。知性をつくりだした人間的な世界に依存したという

人間が作りだしたものにのみ依存した。そのとき、人間的ものがつくられていく前からの人間の根源的なものは、何に依存するはよいだろうか。

二十世紀の社会のなかで、人々は平和を求めながら戦争を繰り返してきたのではない。自由を求めながら、この自由には生きていながら私たちのみつめなければならなかったのではない。豊かさを求めながら、何が豊かさをのびかえ、わからなくなっていくではないか。自然について、生命について、それが何なるかをみつめなくてはならなかったのではないか。

知性をつくりだしたのは、この広い世界であつた。何れ根源的なものは生きている。すべてが私たちの手の中にあるのに、つれに何かがない。私達の社会は、根源的なもので敗北していったのではないか。

安んじ、そんな思いが、現在私たちに(画)の概念を押しつけている。私はうらみあやまち。

(内山龍理の任意(あり)』より)

(注) この場所――著者の大人になってから書きたり、やがて一年の三つの一日をそつと(画)にうつらと、書庫に置くこと。

問1 空欄 X、Y に入れるのに最も適切な組合せを、次の①～⑤のうちから1つ選びなさい。解答番号は16。

- ① X 人々や自然との関係 Y 神々の存在証明
② X 神々と人間との関係 Y 神々の表在
③ X 神々の存在証明 Y 里の神々や絶対神
④ X 神々の表在 Y 神々と人間との関係
⑤ X 里の神々や絶対神 Y 人々や自然との関係

問2 終極節①「神の魂がたえず神となつていく(重)」とあるが、それはどういふ場所か。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は **17**。

- ① 自然とそこに生る人間が相互性をもちながら存在するなかで、普遍は知性によって創出されている人間の意識とでもいへきものが、元の自然なありまに返ることである場所。
- ② 豊かな自然にあふれ自分で選んでくれる人々が住んでいる出身地において、都立の近代的生活のなれずかつり断絶している自分の魂を、ゆつくりと体めることである場所。
- ③ 自然の豊かな自然なかで村の人たごとともに暮らしたから、自分のれからの人生について深く考えることで、新しい自分に生まれ変わり人生をやりなおすことのできる場所。
- ④ 自然のもとで現代が忘れてしまった伝統的な生活を再び戻し、今をともに生きる村人はでなく遠い祖先との魂も身に感じながら、自分の魂を浄化することのできる場所。
- ⑤ 大自然に囲まれ人間と自然が共生しながら暮らすなかで、人間が本来もっていた動物的な能力を呼び覚まし、都立では重視されていた知性・理性なしに存在することのできる場所。

— 9 —

問3 終極節②「神」もそのひとつである」とあるが、それはどういふことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は **18**。

- ① 現代の日本人は、「自然」や「神」という日本に古来より伝わる言葉の代わりに外来語を用いることの名理に気づいていないばかりか、むしろ進んで外来語を用いているというところ。
- ② 現代の日本で「自然」と表現されるものは「意識万象」と言つた方が正確であるように、今私たちが「絶対神」と表現しているものは「神の神」と言つた方が正確であるというところ。
- ③ 「神」の「自然」や「神」は、人間が自分なら同じ感覚のなかでそれらを感ずることで存在してきたのに、現代人はそれらの存在を知性で認識できると思っているというところ。
- ④ 日本の伝統的な自然や神を、外来語概念を用いた「自然」や「神」といふ言葉で言い表すことはできないが、現代の日本人はそれ以外の表現方法をもつていないというところ。
- ⑤ 「神」の言葉遣いが失われた現代の日本では、かつては私たちがともにもつた「自然」や「神」が言葉のうただけで存在する無意味ではなりのものになつてしまつたというところ。

— 10 —

問4 終極節③「現代人は、「重」のような(重)を捨てようとした」とあるが、それはどういふか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は **19**。

- ① 「重」よりもっと広くて進歩して世界に出て行くことで、自分の魂も生き生きと活動し始めるようになるというところから。
- ② 一方で「重」を出ることで軽しさを感ずることも、知性によって進歩していきしれ人間の生きる道はならぬといふことだから。
- ③ 都市や全世界といった広い世界に目を奪われて、「重」こそが「魂を真に自由に消費させる」といふ真実を見失つたから。
- ④ 「重」を捨てていすら進歩を求めようになつてはじめて、広い世界と狭い世界が同じであることになつていふところから。
- ⑤ 知性によって進歩していき人工的な世界に魅力を感じ、その世界を求めていくには「重」を出るしかないといふところから。

問5 本文の内容と合致するものとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は **20**。

- ① 近年の歴史学や産業社会学の研究は、一度は「重」を捨てた現代人に改めて「重」を求めようとする動きを見せている。
- ② 現代の日本人は、外来語の自然が人間の外にある客観的な自然体系を表現する言葉であると認識している。
- ③ 意識の概念は現世と関わることであるため、知性では認識できないものを表現しようとする無意味が生じる。
- ④ 「重」が多くの問題を抱えているのは論理性を超越しているからであり、それを克服することは今後の課題である。
- ⑤ 二十世紀の社会平和を求めつつ戦争を繰り返して来たのは、知性に対する根源的な信頼が欠如していたからである。

— 11 —

第3問 次の文章を読んで、後の問い(問1～4)に答えなさい。

し(は、ボクタイチエロやタ・ヴァンキケラシエロは活躍した十四、六世紀には、「芸術」という概念が「芸術家」という職業も存在していません。

私たちがどのような意識での「芸術家」という概念が生まれのは、十九世紀なかばを過ぎたからのことである。今日、芸術家といふ職業に対して私たちが抱くような敬意は、当時の社会には存在していません。

当時の絵画彫刻の制作は、今日の感覚で見れば「仕事」に近いもので、値段も作品の大きさや使用材料によって計算されるのが普通でした。

祭壇に用いる教会や貴族の作者との間に縁組が交わされ、そこには納期、手賃、寸法、顔料、使用する絵具の品質に至るまでの、細かな取決めが記されていました。なかには、納入後一定期間内に生じた破損や褪色などは、作者の責任で補修するといふ、今日でいう保証サービスに似た条項を含む契約書でありました。

こうした契約で明らかになつた、当時の絵画彫刻の制作は、「作業」として「芸術家」ではなく、「業者」としての職人に依頼されるものでもつたわけですね。

ミケラシエロにしても、六十代のなかには教皇の特別認可によつて祝典を告げられるまでは、石工の同業者組合に属しています。六十代なかばには、ミケラシエロが「天賦剛愎」を天井は描いたミステート十九世紀の絵画彫刻(約一五二一メートル)といふ六階建てのルネサンス期の大聖堂最後の繪師』を推し上げた頃のこと。ドイツ近代を代表する詩人ゲーテが、「人間の成し得る傑作というものを抑りなければこれを畏れ」とと絶賛したミケラシエロの「藝術」も、十六世紀の職業観では、石工や磨治屋のような職業者の一種と見られていたわけですね。

しかし、当時の絵画彫刻は注文制作が基本だったので、依頼主から直接も依頼される受注制の立場は、どうしても強くなるを得ました。後世の絵画市場のよう⁽¹⁾に「顧客」として専門の業者が需要の伸長を支えることもなければ、市場の自由競争によつ

— 12 —

て人権画家の絵が値上げすることはありませんから、教会はつねに買手側の側にとって損が条件で押はれるを得なかつた
おむす。

ほなもまだ、中世以来の身分秩序である、匠人(職業者)、働く人(露工)、働く人(労働者)という三段階の階層を基本に形成
まれましたので、農産物の「働く人」の身分に属する買手は過ぎない画家を彫刻家が、神の代理人である露職者と対等な関係
で交渉することなどは、頭低考えられなかつたはずで。

レスネイナ礼拝堂の玉井画の制作が取りかかっていることしひれを切らした教皇ユリウス二世に「いじらなつたら終るのか」
と聞かれたミケランジェロが、「私が完成させた時です」と答えたというエピソードが残されています。

も世りの仕事は、作り手がその出来に満足した時にも終わらなかつた、という意識でしようが無意味なりし過剰な答であつ
たはずですが、これを聞いた教皇は烈々のことと怒り、「余が汝に死ねさせてくれると誓ひながら、⁽⁹⁾手にした象牙の杖が折
れるまでミケランジェロを折れ置え」といいます。

教皇に怒られ、友人に告げ絶望を得たというミケランジェロでさえ、教会社会での注文主側の現実に直面せざるを得ない向
面があつたわけでは。

そうした十六世紀のミケランジェロの境遇と違い、二十世紀の絵画市場に活躍の舞台を得たピカソにおいては、事情はまづた
く正反対でした。

いかにキエロニスムと権目し、ピカソの権威と権目として半世紀以上にわたる取引を結んだカーンライナーは、ピカソのアト
リエを訪れた際には、たとえ何時も待たせよう、いかに不快な態度をとられようともひたすら我慢、作品を手に入れるまで
は決して離れなかつたらしい。なにかの疑問をめぐり議論をする際は、たとえピカソが如何かな意見を述べようとも絶対に
彼を責めたりしつゝがなかつたよう心掛け、とにかく巨匠が喜びよく絵を渡してくれるよう仕向つたことに全力を注いでいま
すから、ミケランジェロの境遇とは逆に、**X** こととなります。

「権威」といふ概念にしても増えなかつたこととよりむしろピカソは、「早く御でもらいたいだはかりに筆を置いてしまつた

語つていますが、そうした自分の態度も周囲ともあつた作戦のひとつであると告白しています。

一方でピカソは、印象派の隆衰で上得意の地位を確保していた権威ローサントルとは、彼の権威の隣りに移り住むほどの緊
密な親交関係を展開し、ローサントルを国で開催した権威な展覧会より、今日のピカソの基礎を築き上げていま
す。

ピカソの成功の秘密は、十九世紀後半に急成長した権威といふビジネスの可能性を正確に見抜き、自分の作品の市場価値の確
立と向上とをなつて、彼らと同等な手数料をもらつたものをもとに切り抜いていた点にありました。

二十世紀に爆発的に広がる美術市場における、権威といふプロフェッショナルの **a** 的な活用に関して、ピカソほどの
才覚を發揮した画家はいなかつたのです。

今日の知らぬが知るような権威がヨーロッパ美術史に登場したのは、レンブラントやフェルメールで知られる十七世紀のオラ
ンダでのことでした。これは、ルネサンスに続くバロックと並ばれる時代に起きた美術史上の一大事件であり、⁽¹⁰⁾ 権威の制作
事情を一変させています。

背景となつたのは、十六世紀の宗教改革です。教会の権威と権威を告発し、罪を許す権威に代る宗教改革を否定し
た宗教改革は、それまで権威の大スカーパーであつた教会からの注文を激減させてしまい、彫刻家や画家のすべてを宗教の危
機に追い込むことになつたからです。

キリスト教の聖像、聖書の一場面といふ宗教的な主題を愛した画家たちが、それらに代つて働き始めたのが、市民の消
費や市民生活の一場面や、動物や都市景観や田園風景といふ **b** 的な分野で、風景画や動物画といふ私生活にはおなじ
みの絵画ジャンルはこの時期のオランダで生まれています。

貿易で財を成したプロテスタント国であつたオランダでは、新興の富裕商人が自分で絵画を購入し、教会の注文による宗教美
術に代つて、市民の購買力による絵画市場の急激な発展しつゝありました。フェルメールの描く市民生活の「静物画」、レン
ブラントの描いた市民自衛団の集団肖像画は、そうした十七世紀オランダ市民の状況を今日に伝える貴重な史料でもあるのです。

権威といふ美術の専門業者が生まれたら、この地でのことでした。教会も王様が美術品の注文制作を好んだらに代つて、新
興の権威である市民が美術品の在庫の中から好みの美術品を選んで購入するのを好んだからです。

こうした市民需要に促されて、多くの権威の作品を常備して顧客が好みの絵を選べるような専門店として権威は権威、画家も
そうした市場環境に順応して、それぞれ風景や動物や生活図像といふた自分が得意とする絵の美術品を専任して制作を立てる、
専門画家へと分化してこつたことになりました。それまでは、風景画家や動物画家や肖像画家といふた専門分化した権威の営業ス
タイルは存在していなかつたのです。

この十七世紀オランダで生まれた権威といふ新ビジネスが、大躍進の機会を得ることになるのが、印象派の隆盛した十九世
紀後半のフランスでのこと。十八世紀の終わりフランス革命で、絵画彫刻が、宗教改革で失つた教会に頼つて活動していた
スカーパーまで失つてあつた時代のことでした。

権威が、もはや市場にしか頼る経済基礎がなくなつていたこの時代に、突如出現した印象派という新興権威が権威とい
ふビジネスに、従来のなかつたビジネス的な **c** 性を身に着けることになつたからです。

マネ、ルソーから印象派の作品といふは、今日ではヨーロッパ絵画の代名詞として親しまれていますが、その様子がタラシ
と明らかな色彩と筆致は、「粗雑で雑な描き方の権威絵画」としか見なされていませんでした。

おかげで新興権威時代からの絵の買手は権威に安く、権威は画家の生活費を保障するだけで、大連の作品を仕入
れることでもなりました。新時代のマネもルソーも、日々の衣食や家賃を稼ぐために二三五と絵を売つていました。

当然ながら、そうした状況で仕入れられ絵といふものは、ひとたび市場で権威を得た権威には、権威に大きな投資をもたら
すことになりました。裏面は、マネやルソーの作品は、はじめは徐々にでしたが、やがて **d** 的にその地位と権威を上
昇せしめていくことになつた、これを扱う権威は大成がもたらされることになりました。

仕入れ値の安い「権威絵画」は、いったん買れば巨額の利益を生み出すのです。

この印象派チームに絶えりる美術界に、当時、世界有数の経済大国になつたばかりのアメリカの財力が流入するに至つて、

絵画市場は文字通り爆発的に拡大することになります。とりわけマネはアメリカで抜群の人気を誇り、当人も、自分の作品が描
くそばから「ヤンキー」の手は渡つてしまつたを嘆いています。

当時権威に扱われた「アメリカの権威」といふ言葉があります。バリの権威は、財力を誇示したばかりアメリカの新興権威の隆
栄心にほろむ作戦に出、フランス人なら買ひそうもない権威で絵を売りはじめていたのです。

こうしたアメリカ向けの権威取引は、フランス国内での権威価格を吊り上げることになり、この権威がさらに「アメリカ権威」
を吊り上げていくことになつた、まさに権威にとっては救いの止まらなかつたのが、十九世紀から二十世紀初頭にかけての
パリ絵画マーケットに出現することになりました。

十九世紀のピカソが、故国スペインから初めてパリに出て来たのは一九〇〇年。絵の市場が爆発的に成長することになる二十世
紀権威の前の夜のことです。

ピカソの権威としての重要性は、まさにこの二十世紀初頭といふ時期に新興権威としての評価を確立して、印象派に続く権威の
スター地位を求めていたマーケットの要請に、完備に足らなかつた点にありました。

そういう意味でピカソは、絵画史上に初めて登場した「最初から権威市場で買われる権威」といふものを創出した存在といえま
す。

(「権威市場」といふは本場に通じる「よ」)

問1 空欄 X に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 21。

- ① 買い手の側面が陛下の側に回っていた
- ② 買い手が画家の才能に気づいていた
- ③ 買い手が画家の心の中では嘆んでいた
- ④ 買い手の方が画家より一枚上手だった
- ⑤ 買い手の側には芸術的な才能があった

問2 空欄 a、b、c、d に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし同じものを繰り返し用いてはけません。解答番号は a—22、b—23、c—24、d—25。

- ① 投機
- ② 戦略
- ③ 倫理
- ④ 世俗
- ⑤ 加減度

問3 傍線部①「画商という専門の業者」とあるが、彼らが社会に登場し躍進した背景となる出来事を述べたものとして適当なものを選びなさい。解答番号は 20。

- ① 宗教改革によって、かつては絵画彫刻を数多く注文していた教会からの制作依頼が激減してしまったこと
- ② 貿易などで富を蓄えた商人らが、教会に代わって絵画を購入するようになり、絵画市場が生まれたこと
- ③ 財を成した新興市民が一度に大量の絵画を求めたりして、多くの画家が作品を常備するの必要が生じたこと
- ④ 社会の政治的変動により、それまで絵画彫刻の制作を依頼していた王侯貴族が世の中から姿を消したこと
- ⑤ 市民市場において絵画や彫刻の売買が仲立ちすることで、多額の利益を得る可能性が生まれたこと

問4 傍線部②「手にした委命が折れるほどミケランジェロを打ち倒した」とあるが、教皇がこのような態度を取ったのはどうしてか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 27。

- ① 神の代理人たる聖職者の教皇は、神との約束を簡単に反故にするミケランジェロの傲慢な態度を許して許すことができなかった。
- ② 身分の低いミケランジェロが、卑下位の身分である教皇の質問にまともに答えようとせず、教皇を侮辱にしようとする態度を取ったため。
- ③ 制作などといったものない聖職者の教皇には、制作について誠実な意見を述べたミケランジェロの言葉の意味が十分に理解できなかったから。
- ④ 社会の最下層に属するミケランジェロが、最前階層に君臨する教皇の意向に添わない行いをしたばかりか、教皇に対して自己主張をしたから。
- ⑤ 一介の職人にもまなないミケランジェロを友人として処遇していた教皇は、契約を束縛しようしないミケランジェロに深く失望したから。

問5 傍線部③「絵画の制作事情を変えていきます」とあるが、「絵画」の制作のあり方はどのように変化したか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 28。

- ① キリスト像や聖母像といった宗教的な題材を描き、それを制作者自ら教会に売り込むというあり方から、画家が自分の得意とする題材を描き、それを画商に売ってもらうというあり方へと変化した。
- ② 依頼主から直接注文を受け、作品の題材や材料などについての細かなやり取りを決めて従って制作するというあり方から、画家が自分の思い通りの作品を自由に制作するというあり方へと変化した。
- ③ 教会の発展に資するような宗教義理を説き明かす態度で制作するというあり方から、新しく登場した市民らの生活を進展させるためにも、市民の肖像や生活を描くというあり方へと変化した。
- ④ 職人としての制作者が、依頼主の希望に添いつつも自分の技量を売込みたくして制作するというあり方から、作家が自分の個性を思う存分に表しながら制作するというあり方へと変化した。
- ⑤ 教会や王室の命に従い、自らの姓名を何ら發揮せぬままに制作を依頼されるというあり方から、才能さえあれば顧客の画商を頼りたくない作品をいくつでも制作できるというあり方へと変化した。

問6 筆者は、ピカソをどのような画家だと考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 29。

- ① 絵画制作の才能はミケランジェロほどではないが、画商を自由自在に操り、彼らを使って自分の作品の値を上げること
に成功した画家。
- ② 画商というビジネスの可能性を正確に見抜き、当時の絵画市場において、自分の作品を言葉巧みに高額で売りつける術
に長けた画家。
- ③ 画商とうまく付き合い、急速に拡大する美術市場を巧みに利用することで、自分の作品の市場価値を高めるという才能
を有した画家。
- ④ 絵画市場が拡大するという好機に遭遇し、当時前衛絵画であった印象派の画風を真似することでマーケットの要請に完
璧に応えた画家。
- ⑤ アメリカ資本が絵画の価格を吊り上げていた時代に画家となり、そのアメリカで抜群の人気を得るといふ非常に幸運に
恵まれた画家。

— 21 —

問7 本文の内容と合致するものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 30。

- ① 自身も芸術家であるゲーテは、ミケランジェロの時代にあつて彼の作品の偉大さに気づき、その才能を褒めたたえた数
少ない人物のうちの一人であつた。
- ② 風景画家や静物画家は昔から存在したが、彼らが世に認められるようになったきっかけを作つたのは、彼らのスポンサー
であつた王侯貴族たちである。
- ③ 発表当初は人々から顧みられなかつた印象派の作品に高い値がつくようになったのは、彼らの作品の芸術性が徐々に理
解されるようになったからである。
- ④ 十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、アメリカの新興富裕層は、異常なほど高い価格で絵画を売りつけてくるバリの
画商たちを苦々しく思つてた。
- ⑤ 今日では自明のこととなっている、特別な才能をもち人々から敬意を払われる「芸術家」という概念が形成されたのは、
近代以降のことである。

— 22 —